

八年間近くも続けているわけです。私の真似をしようと思えば二十八年近くかかるわけです。

昭和六年、浜口雄幸総理大臣がピストルで撃たれて入院されたことがあったのです。そのとき私が見舞いのはがきを書体を変えて毎日出したのです。百日続ける予定で見舞いの文章を百日に割り、一日一語ずつ書体を変えて出したのです。ところが毎日新聞社が「どこの誰からかわからないが、毎日浜口首相に華文字の見舞いのはがきをよこしている。「閣下のごとき偉傑を空しく葬り去らんとせし国賊は」まで来ている。明日はどんなのが来るかなあ・・・といって浜口首相が楽しみにして待つておられる」という記事を書いたのです。その時京都の兄から電報が来て、これは弟が出しているに決まっていると聞いて知らせて来たのです。それからその年、五月二十九日、東京府、市後援で朝日新聞社の大講演で、中根式速記文字大講演会を開く時、清浦伯や近衛公爵、文部大臣などから祝電、祝辞をいただくので浜口首相からかと思ひ、秘書をお尋ねしたのでした。どこの誰からかわからないというのは私でしたと言ったのですが、これは、言わなかったらよかったと思つてゐるのです。百日続け、前もつてアルバムを奥さんにお送りして、それに張つていただくようにしたものでした。

それから京都の両洋中学の大恩人、清浦伯にも百日続け、一日一語ずつ、ご援助を感謝し、ご健勝を切念と書いてあげたのです。ところが四十五日、四十五枚目だったと思うのですが、清浦伯からお手紙が来て、「精神はわかった、はがき代もいることだし、華文字のはがきはこれまででよい」ということでそれま